



ル ソ ー

桑原武夫 訳

世界古典文学全集

筑 摩 書 房

ル ソ ー

世界古典文学全集 第49巻

昭和 41 年 10 月 5 日初版第 1 刷発行
昭和 43 年 6 月 25 日初版第 2 刷発行

訳 者 桑 原 武 夫

発 行 者 竹 之 内 静 雄

発 行 所 株式 会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町 2-8
振替東京 4123 電話 (291) 7651

目次

告白

桑原武夫訳

第一部

まえがき

第一卷

第二卷

第三卷

第四卷

第五卷

第六卷

第二部

第七卷

第八卷

219 171 140 109 83 56 30 5 5

解	年	地	索
說	譜	圖	引
第 九 卷	第 十 卷	第 十 一 卷	第 十 二 卷

桑
原
武
夫

421 375 346 309 254

ル
ソ
ー

解	年	地	索
說	譜	圖	引
第九卷	第十卷	第十一卷	第十二卷

桑
原
武
夫

421 375 346 309 254

告白

第一部

これこそは自然のままに、まったく真実のままに正確に描かれた唯一の人間像、このようなものは、かつてなく、また今後もおそらくないであろう。わたしの運命あるいはわたしの信頼が、この草稿の処置をゆだねたあなたが誰であろうとも、わたしは自分の不幸とあなたの真心にかけて、また人類の名において、この類例なく、また有用な作品を闇に葬ってしまったわぬようにお願いする。これは、確かにこれから開始しなければならぬ人間研究にとって、最初の対照書類として役立ちうるものである。そしてまた、わたしの敵どもによって歪曲されていないわたしの性格の唯一の確実な記録を、わたしの死後の名誉から除かぬようにお願いする。つまるところ、たとえあなたがわたしの不倶戴天の仇敵の一人であらうとも、わたしの遺骨にたいしては敵たることをやめてほしい。そして、あなたもわたしもは生きていない時期にまで、むごい迫害をおよぼすことはしないであらう——せめて一度は、あなたが性悪く復讐しようと思えばできた時に、寛大でやさしくしたという気高いあかしをえられるために。かつて一度も悪をなさず、またなそうとも欲しなかった人間にたいしてなされる悪が、もし復讐とよばれるものとすればである。

第一卷

内部において、また皮膚において

一、わたしはかつて例のなかった、そして今後も模倣するものはないと思う、仕事をくわだてる。自分とおなじ人間仲間に、ひとりの人間をその自然のままの真実において見せてやりたい。そして、その人間というのは、わたしである。

二、わたしひとり。わたしは自分の心を感じている。そして人々を知っている。わたしは自分の見た人々の誰ともおなじようには作られていない。現在のいかなる人ともおなじように作られていないとあえて信じている。わたしのほうがすぐれてはいないにしても、少なくとも別の人間である。自然がわたしをそのなかへ投げこんで作った鑄型をこわしてしまったのが、よかったかわるかったか、それはこれを読んだ後でなければ判断できぬことだ。

三、最後の審判のラッパはいつでも鳴るがいい。わたしはこの書物を手にして最高の審判者の前に出て行こう。高らかにこう言うつもりだ——これがわたしのしたこと、わたしの考えたこと、わたしのありのままの姿です。よいこともわるいことも、おなじように率直にいいました。何一つわるいことをかくさず、よいことを加えもしなかった。多少どうでもいい装飾を用いたところがあれば、それはわたしの記憶の喪失で

(1) この題名のないノートは、ジュネーヴ草稿にのみ見出される。

(2) ベルセウス『諷刺詩』三ノ三〇に「わたしはおまえを内部において、また皮膚(外部)において知る」(わたしはおまえをすっかり正確に知るの意)とあるのを、ルソーが一部分採用したもの。

は、弟と夫が不在のとき、義妹と二人の子供と散歩しながら、誰かがこの二人のうわさをしたのをきいて、つくった即興詩である。

遠くへ行った二人の紳士は

わたしたちにはさまざまになつかしい。

わたしたちの友です、恋人です

わたしたちの夫です、兄弟です

そしてこの子らの父親です。

四、父がどうして妻をなくした悲しみにたえたか、わたしは知らないが、とにかく一生なぐさめられなかったことはよく知っている。父はわたしを母の身がわりと考えていた。しかもわたしは彼女を彼からうばったことは忘れえなかった。彼が溜息をつき、身をふるわせてわたしをかく抱擁するとき、にがい後悔が彼の愛撫にまじっていることを感じぬことはなかった。だから父の愛撫はよいにやさしくもあった。「ジャン・ジャック、母さんの話をしよう」と父がいうと、「ええ、お父さん、また泣くんでしょう」とわたしは答えたものだ。これをきくだけで、父の眼には涙があふれた。「ああ」と、せつなそうにいう。「母さんをかえしてくれないか。お父さんをなぐさめておくれ。母さんがわたしの心につくって行った穴をふさいでおくれ。おまえがただわたしの子だというだけだったら、こんなに可愛いだろうかしら？」この母をなくしてから四十年後に、父は二度目の妻の腕に抱かれて死んだ。しかし、口に最初の妻の名をよび、心の奥にはわたしの母の面影をうかべていたのだ。

五、わたしに生命をあたえてくれたのは、こういう人たちであった。天が彼らにさずけた性質のうち、感じやすい心、この一つだけをわたしにつたえてくれた。この心は父母には幸福のたねだったが、わたしの一生ではあらゆる不幸のたねとなった。

一、わたしは生まれたとき、ほとんど死にそうな子だった。育ちそうなふうではなかった。わたしはある病気の萌芽をもって生まれたが、そ

れは年月とともにつのって行き、今ではほんのときどきしか休ませてくれない。その病気のたえまは、また別の悩みにいつそうひどく苦しめられるのだ。父の妹の一人で、独身の、やさしいつましい叔母がわたしをよく世話してくれ、いわばわたしの命を救ってくれた。わたしがこれを書いていいるいま、この叔母はまだ生きていいる。すでに八十になって、酒でからだをこわしてしまった年下の夫を介抱している。やさしい叔母さん、わたしはあなたがわたしを生かしてくれたことは許してあげましょう。あなたの老後に、わたしの一生のはじめにあなたがつくってくださった慈愛のこもった世話の御恩がえしをできないことは何とも残念です。それから、女中のジャクリーヌもまだ頑健で生きていいる。わたし

(1) 六月二十八日生、七月四日洗礼。

(2) デイディエ・ルソーは、パリ近くのモンレリ出身で、一五四九年に宗教上の理由でジュネーヴに移住した。ジャン、ダヴィッドの二代をへて、イザックにいたる。彼は家業の時計師の徒弟奉公をへて、一時ダンス教師となつたが、あとは時計師をつづけた(一六七二—一七四七)。

(3) シュザンヌは一六七三年にやはり時計師の娘として生まれ、九歳のとき父を失い、伯父ベルナル牧師に養われた。結婚(一七〇四年)前、風紀上の戒告を受けたことがある。伯父から六千、母から一万フロランの遺産をもらった。

(4) ガブリエルとテオドラ・ルソーの結婚は、じつは五年前の一六九九年であった。

(5) 一七一七年ユジエヌ公がトルコ軍を撃破した戦。学者の考証によると、ベルナルは一七一一年に帰国しており、この戦には参加していないという。

(6) フランソワ、一七〇五年三月十五日生まれ。

(7) 七月七日死。

(8) 尿閉症。別の悩みとは彼のうけた迫害をさす。

(9) シュザンヌ・ルソー(一六八二—一七七五)。四十八歳のとき、ニヨン

の市民ゴンスリュと結婚した。愛称シュゾン。

(10) ジャクリヌ・フアラマン。靴屋の娘、一七七七年死。

きた空白をうめるためにしただけです。真実でありうると考えた場合のみ真実として仮定したけれど、偽りと知ってそうしたことは決してない。自分のありのままの姿を示しました。わたしが事実そうであった場合には軽蔑すべきものの、卑しいものとして、また事実そうであった場合には善良な、高貴なものとして書きました。あなた御自身見られたとおりに、わたしの内部を開いて見せたのです。永遠の存在よ、わたしのまわりに、数かぎらないわたしと同じ人間を集めてください。わたしの告白を彼らが聞くがよいのです。わたしの下劣さに腹をたて、わたしのみじめさに顔を赤くするなら、それもいい。彼らのひとりひとりが、またあなたの足下にて、おのれの心を、わたしとおなじ率直さをもって開いてみせるがよろしい。そして、「わたしはこの男よりもいい人間だった」といえるものなら、一人でもいってほしいのです。

一、わたしは一七二二年にジュネーヴで、市民イザック・ルソーと、同じく市民シュザンヌ・ベルナルとのあいだに生まれた。ごくとぼしい財産を十五人の子供たちのあいだで分けねばならぬため、わたしの父のもらう分け前はほとんど無にひとしくなったので、父は時計師の職を唯一の生計の道としなければならなかった。父はこの職ではじっさい腕達者であった。わたしの母はベルナルという牧師の娘で、父より金持だった。聡明で美しいひとだった。父がこの母を妻としたのはなみなみの苦勞ではなかったのだ。二人の恋はほとんど生まれると同時にじまっていた。八つか九つのときから、二人はラ・トレイユの大通りを毎晩いっしょに散歩した。十のとき、もう互いにはなれられない仲だった。共感、心の一致が、習慣によって生まれた気持をいよいよ固くした。二人とも生まれつきやさしく感じやすい性質だったから、誰かの心の中に自分と同じ気持を見出すことのできる時を、ひたすら待っていた。というよりむしろ、この時機のほうが彼らを待っていた。そこで双方が、受けいれるべく開いてくれた最初の心の中に、自分の心を投げこんだのだ。二人の恋を邪魔するような事情がかえってこれをはげしくさせた。恋人

をえられない青年は悲しみにやつれていった。女のほうでは忘れるために旅に出ることをすすめた。旅行したが、ききめはない。前より恋をつのらせて帰ってきた。女は優しく、心変りしていなかった。こうした試験があつて後、もう二人には生涯愛しあうしか道はなく、それを誓った。そして天意は二人の誓いをまっとうさせた。

二、母の弟のガブリエル・ベルナルが父の妹の一人を恋するようになった。が、彼女は自分の兄が先方の姉と結婚するという条件でなければ、自分も結婚しないといった。恋が万事を解決した。そして、同じ日に二組の結婚式が行なわれた。こうして、わたしの叔父はわたしの叔母の夫となり、子供たちは二重の従兄弟ということになった。子供は一年たつと両方の家に一人ずつ生まれた。まもなく、わたしたちは遠く別れねばならなくなった。

三、叔父のベルナルは技師だった。叔父はユジエヌ公につかえて神聖ローマ帝国やハンガリーに行った。彼はベルグラードの攻囲戦や野戦で武勲を立てている。わたしの父は、わたしのただ一人の兄が生まれて後、招かれてコンスタンチノープルへ行き、トルコ宮廷付の時計師となった。父の留守中、母の美貌、その聡明で諸芸*のできることは人々にも熱心な一人だった。それから三十年後に、わたしに母のことを話しながら、ほろっとしたくらいだから、その情熱ははげしかったにちがいない。わたしの母は身をまもるのに貞操以上のものをもっていた。夫を心から愛していたのだ。早く帰国するようにといってやる。夫は何もかも捨てて帰った。わたしはこの帰宅がみのらせた悲しい結実である。十月たつて、わたしは病弱な子として生まれた。わたしが生まれたために母は死んだ。こうしてわたしの誕生はわたしの不幸の最初のものとなった。

* 彼女はその身分としては、かがやかしすぎるほど諸芸ができた。

彼女を熱愛した父の牧師が教育にたいへん気をつかったからだ。彼女は絵をかき、歌をうたい、テオルブ〔マンドリンに似た楽器〕でみずから伴奏し、本をよみ、かなりな詩をつくった。ここに示すの

父の家から逃げたように、そこからも何度も逃げ出した。わたしはこの兄にはほとんど会わず、親しくしたともほとんどいえないほどだ。それでも愛情を感じていたことにはかわりはない。向うでも、放蕩者（ほうとうしや）が何かを愛することが出来るものなら、その程度の愛情はもっていた。こんなことも思い出す。あるとき、父が怒って兄を乱暴に折檻（せうがん）したので、わたしはげしい勢いで二人のあいだにとびこんで、兄を力いっぱい抱いた。そうやって兄のからだを自分の身でかばい、かわりにぶたれながら、この姿勢のまま動かなかったのも、わたしの泣き声や涙に閉口（へいこう）したのか、それとも兄よりわたしをひどい目にあわすことはしたくなかったのか、父は許すより仕方がなかった。その後、兄はいよいよ不良になって、家を飛び出し、まったく行方（ゆくえ）が知れなくなった。しばらくして、ドイツにいることがわかったが、一度のたよりもよこさなかった。この時から消息がたえてしまい、こうして、わたしは一人息子になってしまったのだ。

六、この不幸な子がなおざりに育てられたにしても、弟のほうはそんなものではなかった。国王の子供でも、わたしが幼いころにうけたような気のくばりようで世話（せわ）はされないうらう。周囲から偶像あつかいされ、そしてこれはもつと稀（まれ）なことだが、可愛がられはしたが決して甘やかされはしなかった。わたしは父の家を出るまで、ただの一度も往来（わらい）でよその子供と駆けまわったりすることは許されなかった。こうした気まぐれな性癖（せいせき）のただ一つをも、わたしはひとから抑えられ、または満足させられる必要がなかった。こうした性癖（せいせき）を世間（よ）では自然（しぜん）のせい（せい）に帰しているが、実はまったく教育から生まれるものなのだ。わたしは年齢（ねんれい）相応（さうおう）の欠点（けってん）をもっていた。おしゃべりで、食（た）いしんぼうで、ときどきはうそをつきだった。果実（くだもの）やボンボンや食べものを失敬（しやうけい）することもやりかねなかった。しかし、決して悪事（あくじ）をしたり、ものを傷つけたり、他人（たにん）に罪（つみ）をきせたり、あわれな動物（どうぶつ）をいじめたりすることを、快く思（おも）ったことはなかった。しかし、たった一度、近所（きんじよ）のクロの奥（おく）さんというひとの鍋（なべ）の中へ、このひとが説教（せきぎょう）をききに çık（で）かけている留守（くす）に、小便（せうべん）をしたことを覚えていた。

正直にいうと、この思い出がうかぶと、今でも吹き出してしまふ。クロの奥（おく）さんは、いい人だったけれど、わたしが一生（いしやう）で出会（であ）った一ばんの口（くち）やかましい婆（ば）さんだったからだ。わたしがごく幼（わか）いときにした悪事（あくじ）のいつわりのない話は、短（みじ）いがこれだけだ。

七、眼（め）のまえにはやさしさの典型（ていけい）のような人々（ひと）ばかりを、周囲（しうい）にはこの世（よ）でもっとも善良（じやうぜん）な人々（ひと）ばかりを見ていたわたしが、どうしていいわるな子（こ）になれたらう。父も叔母（おしむ）も女中（にようぢゆう）も親類（しんれい）の者（もの）も知人（しにん）も近所（きんじよ）の人々（ひと）も、わたしのまわりのみんなが、正直（しやうじき）のところ、わたしのいいなりになつてはくれなかったけれども、わたしを愛（あい）してくれ、わたしもまたその人（ひと）たちを愛（あい）していた。わたしの意志（いし）はすこしも刺（さ）激（げき）されず、すこしも逆（さか）らわれなかったから、意志（いし）をもっているなどという自覚（じかく）はてんでわたしには生まれなかった。ある親方（おやう）のところへ徒弟（ていど）奉公（ほうこう）に住（す）みこむまで、わたしは気まぐれな欲望（よきやう）などというものを知らなかった、と誓（ちか）つてもいい。父（ちち）のそばで読（よ）んだり書（か）いたりして過（あ）ぐす時間（じかん）や、女中（にようぢゆう）につれられて散歩（さんぽ）に行く時のほかは、いつも叔母（おしむ）といっしょにいた。そばに立（た）ったり坐（ま）ったりして、叔母（おしむ）が編物（あみもの）するのを見たり、歌（うた）うのを聞（き）いたりしながら、わたしは満足（まんぞく）だった。彼女の愛嬌（あいぎやう）、やさしさ、かわい顔（かわい）などはいへんつよい印象（いんさう）を残（のこ）したので、いまだにその様子（ようす）、眼（め）つき、態度（たいど）が眼（め）にうかぶ。やさしいちよつとした言葉（ことば）もおぼえていて。どんな着物（きもの）をきていた

(1) 主としてオノ・デュルフェの『ラストレ』など、十七世紀の空想的恋愛小説。

(2) オロンダートはラ・カルブルネードの小説『カサンドル』の人物、『アルタメーヌまたは大シルス』はスキュデリ嬢の小説の題名、ジュバはラ・カルブルネードの『クレオパトラ』の人物。アゲシラス以下は『偉人伝』に出てくる人物。ルソーはブルタルコスをアミヨの仏訳でよんだ。

(3) ローマの英雄。敵陣（てきじん）にしのび込み、敵將（てきしやう）を刺（さ）そうとしたが、あやまって従者（じゆうしや）を殺（ころ）し、とらえられて拷問（ごうもん）をうけたが、彼は祭壇（まつだい）上（うへ）にもえる神火（しんか）に右手（みぎて）をつきいれ、平然（へいぜん）としていたので、敵將（てきしやう）はその勇氣（ゆうき）に感動（かんとく）して許（ゆる）したという。

か、どんな髪形だったかといえるし、当時のはやりで、黒い髪毛が額の上に小さく巻いて垂れていたのも忘れない。

八、わたしはこの叔母から音楽の趣味、というより情熱をおしえられたと信じている。もともとこれはずっと後に発達したのだけれども。叔母は歌謡を不思議なほどたくさん知っていて、甘い、かほそい声でうたった。このすばらしい独身婦人のはれはれした気性は、彼女自身からも周囲のものからも、物思いや悲しみを遠ざけた。叔母の歌の魅力は非常なものであったので、その歌のいくつもがいつまでも記憶に残ったばかりでなく、もう記憶力のなくなった今日、子供のときからすっかり忘れていたようなもので、老いゆくとともに新しくよみがえってきて、言葉にはあらわせぬ魅力をおぼえるのだ。心労と苦痛にすりへられた、わたしのような老いぼれが、ときどきこんな歌の節々をもうかすれた、ふるえ声で口ずさんで、思わず子供のように涙を流していることのあるのを、誰が知っていよう。その歌のなかに一つ、節まわしだけはちゃんとおぼえているのがある。脚韻はぼんやり浮かんでくるのに、後半の歌詞はいくら骨折ってみてもいつも浮かんでこない。その初めの部分と思いつける残りの文句はこうだ。

Tircis, je n'ose

Ecouter ton chameau

Sous l'ormeau;

Car on en cause

Déjà dans notre hameau.

.....

..... un berger

..... s'engager

..... sans danger;

Et toujours l'épine est sous la rose.⁽¹⁾

こんな歌が、わたしの心にどうして情味ふかい魅力があるのかと、考えてみる。自分にもわけのわからない気まぐれだ。とにかく涙にさえぎられて、どうしても最後までうたえなくなってしまう。この歌詞の忘れたところを知っている人でもあれば、教えてもらおうと思い、パリへ手紙を出すことを何度も考えた。しかし、もしシュゾン叔母さん以外の誰かが歌ったとわかると、この歌を思い出す楽しさよりも大かた消えてしまうことは確かなのだ。

九、わたしが生活へ足をふみ入れたころの最初の愛情はこういうものであった。このように尊大であると同時にこのように柔和な心、女性的でありながら、しかも強情なわたしの性格はこうしてつくられ、あるいは現われはじめた。そしてこの性格は弱気と勇気のあいだを、柔弱と美徳のあいだを始終ぐらついて、あくまでわたしをわたしの自己と矛盾させ、禁欲と享楽、快楽と節制、そのどちらをも取りにがす結果にしてしまった。

一〇、こうしたわたしの教育の進路がある出来事によって中断せられ、その結果がその後のわたしの生活を左右することになった。わたしの父は、フランスの大尉で執行会議の議員を縁者にもつゴーチエという人と喧嘩をした。この傲慢で卑劣なゴーチエという男は鼻血を出し、復讐をはかって、父が市中で剣を抜いたと訴えた。牢へ入れられそうになった父は、法律どおり告発者も同様に監禁されるべきだと主張したが、いれられず、名誉と自由をそこなわれるのを我慢するより、ジュネーヴを去って、余生を他国で暮らすほうをえらんだ。

一一、わたしは当時ジュネーヴの築城工事に雇われていたベルナル叔父に後見されて、残ることになった。叔父の長女はなくなったが、わたしと同じ年の男の子がいた。わたしたち二人はボセーのランベルシエ牧師のところへ寄宿にやられた。ラテン語と、教育という名で教えられることになりました。これを、そこで勉強するためだった。

一、この村ですごした二年間は、わたしのローマ人気取りの荒い気性

を少しやわらげ、子供らしい気持にもどしてくれた。何一つ課せられなかったジュネーヴでは勉強や読書が楽しかった。それがほとんど唯一の娯楽だった。ボセーでは勉強させられるので、息ぬきの遊びが楽しみになった。田園はわたしには目新しく、それを楽しむことに飽かなかった。田園を愛する気持はたいへん強く、これは終生消えなかった。この村ですごした幸福な日の追憶は、その後いつの時もわたしにこの生活や楽しさをなつかしげらせ、それは再びこの地をおとずれた日までつづいた。ランベルシエ氏は、われわれの教育をなげやりにはしなかったが、無理な宿題を課するようなことはせず、ごくもの分りのいい人だった。この人のやり方のよかった証拠に、束縛ということの大嫌いなわたしでさえ、当時の勉強の時間を思い出しても不愉快な気が少しもしない。また、この人から多くのことを学びはしなかったけれど、学んだことはらくに学んだし、また覚えたことは少しも忘れていない。

二、この田園生活の純朴さは、友情というものにわたしの心を開いてくれたことで、じつに計りしれぬ利益があった。それまでわたしは高尚だが空想的な感情しか知らなかった。平和な静かな環境で共同生活する習慣が、わたしと従兄弟のベルナールを、愛情で結びつけた。まもなくわたしは彼に、兄にいだいたよりずっと親身な気持をもつようになり、これがいつまでも消えなかった。彼は背の高い、やせぎすの、弱々しい少年で、からだが弱々しいように心も柔和だった。わたしの後見人の息子だというので家で大切にされるのをかさにきる、などといったこともあまりない。わたしたちの勉強、娯楽、好みはみな同じだった。どちらも一人ぼっちで、同じ年で、どちらも友達がほしかった。二人を引きはなすことは、殺すも同然だった。互いの友情を実証するような機会はありませんなかつたけれど、友情はすいぶんはげしくて、片時も離れて生きていられぬのみならず、わかれる時があるうなどと考えもしなかつたくらいだ。二人とも優しくされると、すぐうれしくなるたちだし、強いられなければ愛想よしだったから、どんなことでも考えが一致した。監督している人たちのひいきで、その目の前では彼のほうがいくらか羽ぶりが

いいかわりに、二人だけにいる時には、わたしのほうにいくらか分がある、というわけで、ちゃんと均衡が保たれた。学課のとき彼がこまると、わたしはそつと助言してやった。わたしの作文が書けてしまうと、彼のほうを手つだつてやる。遊びではいつもわたしの活潑な好みが先導役をつとめた。こうしてわたしと二人の性格はぴったり合い、友情はまごころのこもったものだったから、ボセーやジュネーヴではほとんど片時もわかれずにくらした五年あまり、正直のところ、よく喧嘩はしたけれど、ひとが引きはなす必要などなく、その喧嘩も十五分以上つづいたことは一度もない。ひとに告げ口したりしたことなど一度もなかった。こんな指摘は大人げないかもしれぬが、このような例は子供の世界でも、おそ

(1) 完全な歌詞は、

Tircis, je n'ose
Ecouter ton chalumeau
Sous l'ormeau ;
Car on en cause
Déjà dans notre hameau.
Un cœur s'expose
A trop s'engager
Avec un berger ;
Et toujours l'épine est sous la rose.

(大意) チルシスさん、わたしはもうしますまい、ニレの木の下で、おまえの笛をきくことは。だって、もう村ではうわさが立っている。羊飼いとあまり深まになるのはあぶないよ。バラの下にはいつもトゲがある。

(2) ジュネーヴの南、約五キロの小村。政治的にはサヴォワに、宗教的にはジュネーヴに属していた。

(3) ジャン・ジャック・ランベルシエ(一六七六—一七三八)は、一七〇八年からボセーの牧師で、七つ下の妹ガブリエル(一六八三—一七五三)といっしょに暮らしていた。

らくほかに類があるまい。

三、ボセーの生活は、すっかりわたしに適したものだ。それから、これ
 がもっと長つづきさえすれば、わたしの性格もすっかり固まったにちが
 いがない。やさしい、情味のゆたかな、平和な感情がその土台になってい
 た。人間のなかでわたしほど生まれつき虚栄心の少ない者はないと思う。
 興奮して一気に高尚な感情にまで高まることもあるが、すぐまたいつも
 のものうい気持に落ちこんでしまうのだ。自分に近づくすべての人から
 愛されたいというのが、わたしのもっとも強い欲望だった。わたしはお
 となかったし、従兄弟もおとなしい。わたしを監督している人た
 ちもやはりそうだった。まる二年間というものの、わたしは荒々しい感情
 を見もしなければ、その犠牲になったこともない。何もかもがわたしの
 心のうちに、わたしが自然から受けたままの氣質を育ててくれた。みん
 ながわたしについて、またあらゆることについて満足している様子を見
 るほど楽しいことはなかった。聖堂で教理問答に答えるとき、つい行き
 づまってしまつて、ランベルシエ嬢の顔に心配そうな苦しそうな表情を
 見ることほど、つらいことはなかったが、これは一生忘れまい。それは、
 大勢の前でしくじる恥ずかしさよりもつらかった。人まえでの失敗もひ
 どくつらかったのだけれど。というのは、はめられることにはいっこう
 無関心だが、恥をかくことには特別に敏感だったからだ。そしてわたし
 はランベルシエ嬢に叱られる心配よりも、このひとを悲しませることの
 ほうが気がかりだった、そこにはつきりいうことができる。

四、しかし、彼女も必要な場合に厳格さに欠けてはいなかったことは、
 兄さんとおなじだった。だが、その厳格さはほとんどいつも道理にな
 っていて、決して一時の興奮のせいなどでなかったから、わたしはつら
 く思つたけれど、反抗心は少しも起こさなかった。罰をうけることより、
 相手の心持をわるくするのがいやで、不機嫌な顔を見るのが折檻よりつ
 らかった。これ以上うまく説明するのは少しむずかしいが、いっておか
 ねばならない。ひとがいつも無差別に、そしてしばしば無考えに行なっ
 ている方法が、将来どんな影響をおよぼすかを、もう少しよく見きわめ

たなら、子供のあつかい方もどんなに変わるだろうか！ ごくありふれ
 た、そして忌むべき一つの実例から、大きな教訓をひき出しうることも
 あろうかと考えて、わたしは思いきつて、その実例を話すことにする。

一、ランベルシエ嬢はわたしたちに母のような愛情をもっていただけ
 に、また母らしい威厳をもっており、わたしたちが悪いことをしたとき
 にはときどき、子供がよくうけるような折檻を行なうこともあった。彼
 女はかなり長いあいだ、おどかしただけにとどめたけれど、わたしはそ
 の新しい罰のおどかしだけでふるえ上がったものだ。だが、実際にそれを
 やられてみると、あらかじめ心配したほど恐ろしいものではなかった。
 それより、じつに奇妙なことに、この懲罰は罰をくわえた人をいよいよ
 好きにした。この愛情に真実があつたのと、わたしの生まれつきのおと
 なしさがあつたればこそ、わざと悪いことをして、同じ扱いをまたして
 もらおうといった誘惑をよく抑えることができたのだ。というのは、苦
 痛のうち、恥ずかしさのうちにさえ、一種の肉感がまじっているのを感じ
 じて、おなじ手によつてもう一度それを味わいたい欲望のほうに、恐怖
 よりつよくなつたからである。これにはたしかに早熟な性本能がまじつ
 ていたにちがいないから、同じ折檻を彼女の兄からうけても、わたしに
 は少しも快くは感じられなかっただろうと思う。しかし兄さんのほうの
 氣質からいって、この人に代わられたところで別に恐ろしくもなかった
 から、わたしが折檻されないうにつつしんだのは、まったく、ランベ
 ルシエ嬢を怒らせたくないからだった。わたしの場合、好意をもつとい
 えば、それはこんなにつよく働くのだ。それがたとえ感覚から生じた好
 意であっても、そうなので、好意の感情がいつも心の中で感覚を制御す
 るのである。

二、わたしがべつに恐怖心からでなく避けるようにとめていた体刑
 を、また加えられる機会が、わたしの失敗からではなく、つまりわたし
 の意志からではなく、ついにまたやってきた。そこで、いわば少しも心
 のやましさをなく、それを味わうことができた。しかしこの二度目がつい

に最後になった。ランベルシエ嬢はたぶん何かの様子で、この折檻は役に立たないと気がついたらしく、あまり疲れるからこんなことはもうしない、とはっきりいった。わたしたちはその時まで彼女の寝室で、冬などとはときどき同じベッドにさえ寝かさされていたのだが、二日後に別の寝室にうつされた。今後は大きくなった少年としてあつかわれるという、うれしくない名譽をわたしは得たのだ。

三、八つのときにこの三十歳の独身の婦人からうけたこの子供の折檻が、わたしの好みや欲望や情熱、その後のわたしまで、すっかり決定したということ、しかもそれが当然予想されるものと反対の方向をとったということ、誰がそれを信じてくれよう。感覚は目ざめたけれども、わたしの欲望はうまくだまされて別の方向にすすみ、自分の経験の範囲内にかぎられて、それ以外のものを追求しようとはしなかった。ほとんど生まれたときから肉感に燃える血をもちながら、わたしは、どんなに發育の遅い冷やかな氣質の人でも一人前になる年ごろまで、あらゆるけがれから純潔に身を保つことができた。なが年のあいだ、わけも知らずにもだえて、美しい女のひとを熱烈なまなざしでむきほりながめていた。わたしの想像はたえずその姿を思いうかべさせたが、それはもっぱらイメージを自分の好きなように働かせ、どの女もこの女も、ランベルシエ嬢にしてしまうのだった。

四、結婚期を過ぎてからも、この変てこな、執拗な、偏執、狂気といつていいほど強くなった好みややはり残っていて、素行の純潔を失わせそうで、かえってそれを守る結果になった。つましく純潔な教育といえば、わたしのうけたのはまさにそれである。わたしの三人の叔母は申し分なく品行方正だったばかりでなく、いまの女性がとくに忘れていたつつしみを心得ていた。享樂好きの人だとはいえ、父には昔かたぎな礼儀正しさがあって、好きな女たちのそばでも、処女が顔を赤くしそうな言葉は決して使わなかった。わたしの家では、またわたしの前では、そうしたことで子供に氣をつける習慣は、よそで見られぬほど慎重だった。この心づかいは、ランベルシエさんの家でもおなじで、たいへんい

い女中が、うっかりわたしたちの前で少しみだらな言葉をもらしたというので、暇を出されてしまった。わたしは一人前の若者になるまで、両性の結合について明白な考えをついぞ持っていなかったのみではなく、そういうぼんやりした觀念も、いつもいとわしくけがらわしい形で頭にかんんでいた。商売女というものにもった嫌悪は、その後もついに消えなかった。放蕩者は、輕蔑を、恐怖さえ感じずに見ることができなかった。放蕩にこんなはげしい嫌悪をもつようになったのは、ある日、くぼ道を通ってプチ・サコネへ行く途中、両側にある洞穴を見たとき、あいづらはやっていたんだ、と聞かされてからだ。それからこういう行為を思うと、犬のしわざを見たことがいつも連想されて、思い出すだけで胸がわるくなる。

五、こういう幼い時にうけた教育上の先入主はそれ自体、燃えやすい氣質の最初の激発をおそくさせるものだが、それが、さきについてきたように、最初の春の目覚めから生じた異常な性癖によつて強められた。若い血のたぎるのをあましながらも、感じたことしか想像できないわたしは、自分の欲望を自分の知っている種類の逸樂にしか向けることを知らず、嫌悪を感じるようになっていた逸樂のほうへは決して進まなかった。実際は、わたしは少しも気がつかなかったけれど、この二つは非常に近いものだったのだ。おもしろい妄想や色情的な興奮においては、またそんな場合にとときどきやつた非常識な行為において、わたしは想像の上で異性の力をかりたけれど、そういうものが、自分が現に夢中になつてしていること以外に用いられるものとは、かつて思いもよらなかった。

六、だから、わたしは、非常にはげしい、みだらな、早熟な氣質をもつていながら、ランベルシエ嬢が何の気なしに教えてくれたもののほかに、少しも肉感的な快樂を求めることもなく、知ることもなく、思春期をすごした。そればかりではない。年月がたつて大人になつてからも、

(1) 實際は、ルソーは十一歳、ランベルシエ嬢は四十歳ちかくであった。

身の破滅となるべきはずのものが、かえってわたしを安全にしてくれた。昔の少年時の好みが消えうせるどころか、またほかの好みとすっかり合体してしまったので、それを感じによってよびさまされる欲望からどうしても切りはなすことができなかった。この異常さが、わたしの天性の臆病と一つになって、すべて大胆に打ち明けたら、ふるまったりできないために、女のそばではいつも内気な人間にしまった。肉体的な享樂はわたしにとって終着点にうばうこともできず、それとは異なる種類の享樂は、それを求める人間が無理にうばうこともできず、といって、それをあたえうる女から察してもらおうわけにもゆかぬからだ。こうして、わたしはいつも自分のもっとも愛する女たちのそばで、渴望しながら沈黙して、一生をすごしたのだ。自分の好みを告白できず、いくらかそういう気持をのこすような交際で、その好みをいささか慰めていた。横柄な恋人の膝下にひざまずいて、その命令に従い、赦しをこう、そういうことがわたしにはたいへん楽しいことだった。活潑な想像が血を燃えたたしていれはいるほど、わたしはますます内気な恋人のような格好になる。こんな恋の仕方はあまり事をはかどらせず、相手の婦人の貞操には危険なものではないことが察しられよう。したがって、わたしが自分のものにした女はごくわずかだった。しかし、それでもわたしは十分自己流に、つまり想像で、享樂はしていたのだ。わたしの感覚がわたしの臆病な気分や小説風な精神と相まって、わたしの感情を純潔に、品行を正しく守ってにくれたのは、こういうわけだ。同じような好みが、もう少し厚かましい性質と結びついていたら、もっとも野獣めいた逸樂の中にわたしをおとしいれたかもしれない。

七、わたしは、わたしの告白の暗い泥だらけの迷路の中に、じつに苦しい第一歩をふみこんだわけである。いちばんいいにくいことは罪のあることではなく、滑稽な恥ずかしいことなのだ。もう今は自信ができた。今までのことを思いきっていった以上、もうわたしを止めるものは何もない。このような告白をするのがどんなにつらかったかは、わたしは一生を通じて、愛するひとのそばで眼も見えず耳も聞かなくなるほどの

情熱に狂い、前後を忘却し、全身をわななかせるほどになった際でも、決して自分のこの奇癖を打ち明けることができなかったこと、もっともうちとけた時でも、ほかの場合えられぬ唯一の好意を相手に求める勇気のなかったことを考えて、推察していただけよう。そんなことは子供のときにただ一回だけあって、わたしと同じ年ごろの少女が相手だった。それも向うからすすんで持ちかけてきたのだ。

一、こうして感じやすいわたしという存在の最初の足跡までさかのぼってみると、ときには矛盾した外観を示しながら、やはりたがいに一致して単一な結果を力づくよく生みだした要素がいくつも見出される。また、表面は同じように見えても、種々の事情によって非常に異なった結果を生じ、互いのあいだに何らかの関係のあることが想像できないような別の要素も見出される。たとえば、わたしの精神のもっとも雄々しい原動力の一つが、わたしの血の中に淫蕩と柔弱さを注ぎこんだのと同じ源泉から発しているとは、誰に信じられようか。いま話した主題をはなれないで、そこらたいへんちがった印象が生じることを、お目にかけよう。

ある日、わたしは台所につづいた部屋で、ひとり学課を勉強していた。それよりさきに、女中がランベルシエ嬢の櫥を壁のくぼみのところに乾かしておいた。女中が取りにもどつてくると、その櫥の一つが片側すっかり歯が折れていた。誰がいためたのだらう。わたしのほかに部屋に入ったものはなかった。わたしが尋問された。わたしは櫥なんかさわからないという。ランベルシエ兄妹は二人して、わたしをいさめ、白状をうながし、おどかした。わたしは頑強だった。わたしがこんなに図々しくうそをつくのは見初めだとは思ったものの、みんなはわたしのしわざと信じきっているから、いくら抗弁してもきいてくれない。事は重大化していたことだと考えられた。が、この時はもう折檻役はランベルシエ嬢ではなかった。手紙でベルナル叔父が呼ばれ、やってきた。ちょうど従兄弟もわたしのと似たような不始末をやっていたところなので、二人いっ